

「居場所」はどのようなかなあと、思い遣る心を...

昨夜、「ヤンキ - 先生」の実話をベースにしたTVドラマが放映されていた。

先にドキュメンタリ - も放映され、また書籍も多く出版されているのでご存知の方も多いと思う。

ヤンキ - 先生は、中学生の頃から「不良」と呼ばれ、高校時代に暴力事件を起こし退学。親からも絶縁。全国から不登校、薬物、暴力事件、等々での中退者も受け入れる高校に編入。そこで、今も恩師と慕う先生と出逢う。大学四年の時、横浜で交通事故を起こし生死を彷徨う時、恩師が駆けつけ手を握り締め「あなたは私の夢」と励まされ続け、命を取り留める。回復後は、自らの考え方・生き方を変え、教師になる決心をし、「教育とは、本気の思いで、本気になって子どもたちと向き合えば、必ず『正』の結果が出る」との思いから母校の教壇に立ち、自分と同じような境遇の生徒たちと真っ正面から向き合う教育活動を実践。この4月からは、母校を去り、教師になることを決心した『母港』である横浜市 of 市教育委員会に転職するとか。

ドラマの中でも、キ - ワ - ドのように「居場所」というセリフが頻回に出来てきた。この「居場所」という言葉を聞くと、私は、「居場所 = 居がい」に置き換えて聞く。元東京大学名誉教授であり、戦後日本の精神医学会をリードした島崎敏樹氏は、「生きがい（甲斐）」を、「居がい」と「行きがい」の二つの側面から考えることを提示している。

つまり、心の安定する「居がい = 居場所」がなくては、前を向いて自己形成・社会性にチャレンジして得る「行きがい」も見つけ難いということでないかと思う

例えばTVドラマ企画書風に云えば、恩師の「あなたは私の夢」という語りかけと寄り添いに、ヤンキ - 先生にすれば、初めて心の「居場所」を感じ取ったのだろうと思う。だからこそ教師という「行きがい」にチャレンジし、教師という「生きがい」、つまりアイデンティティ - を得たのであろうともいえる。

そう考えると、悲惨な事件、虐待する親、ニ - ト、不登校、閉じこもり、非行、いじめ、自殺、難病、等々の問題も、当事者が「行き甲がい」以前に心の「居場所」がないが故かなとも解釈することが出来る。

こうした当事者のみならず、周りの方々（家族を含め）の心の「居場所」はどのようなかなあと思い遣り、添え木のように寄り添う心の余裕が、現代社会に生きる我々に必要なのではないだろうかとも思う。

(2005 年 3 月 28 日 記)